

古典文学×伝統芸能×新技術

『新猿楽記 ~cirque de kyoto~』

≫開催概要

新型コロナウイルス感染拡大防止のため公演を中止し、内容を変更して、映像作品として公式ウェブサイトにて公開を予定しています。

開催日：2020年3月29日(日) 13:00公演/17:00公演
会場：ロームシアター京都 メインホール
参加対象：13:00公演 どなたでも 17:00公演 小学生以上
料金：全席指定 前売・当日共 一般 1,000円(中学生以下 無料)
定員：各公演 1300人

映像作品概要

収録日：2020年3月28日(土)、29日(日)
会場：ロームシアター京都 メインホール

脚本・演出：高橋 浩

古典芸能監修：小笠原 匡

サーカス監修：QUMIKO

演技協力：エリック・ド・サリア／ナンシー・ルサク

脚本協力：佐藤 雀

演奏：三原 智行／ワタンベ／遠山 貴志／イガキアキコ／稲葉 明德／山本 恭司(特別出演)
出演者：小笠原 匡／青山 郁彦／野崎 夏世／吉本 由美／うえだななこ／元木 行哉／
黒谷 都／目黒 陽介／hachiro／クロワッサンサーカス：清水ヒサヲ・とつ
いはらつとム・花火・ケンタ・吉川 健斗

映像出演：上賀茂やすらい踊り保存会	衣裳：落里美
照明監修：バスカル・ラージリ	所作：飛鳥 左近
照明：阿部 康子	音響FOH録音：武田 雅典
美術：片平 圭衣子	音響monitor：鈴木 信司
テクニカルプロデューサー：林 高士	人形制作：石田 百合
映像編集：高橋 浩／BAKUGA／小山 雅斗	音楽：三原 智之
M A：稲葉 明德／LuckLife Project／武田 雅典	稲葉 明德
映像収録：BUNKYO STUDIO	山本 恭司
記録：高橋 亜季	舞台監督：川崎 耕平
制作進行：田中 麻琴	

インターン：小原真里(KYOTO STEAM-世界文化交流祭-実行委員)

制作：山本 信之／緒方 辰之介

企画・運営：株式会社井筒企画

協力：井筒グループ／ひだか和紙有限公司／上賀茂やすらい踊り保存会／京都府神社庁

≫プログラム概要

平安中期に藤原明衡が著した『新猿楽記』に着想を得た、京都独自の文化創成のプロセスを、現代につながる大衆芸能のルーツ『猿楽』の高いエンターテインメント性を軸に表現する新たなパフォーマンス「新猿楽記～cirque de kyoto～」を制作しました。

2018年に始動した『新猿楽記』創成プログラムの成果を示すステージプログラムを、伝統芸能の継承者や日仏のパフォーマー、そして様々な技術を有する企業等とのコラボレーションによって表現する舞台作品を制作しましたが、新型コロナウイルス感染拡大の状況を鑑み、上演内容を変更し、映像作品として展開しました。

≫『新猿楽記』とは

『新猿楽記』とは平安時代中期に、儒学者・藤原明衡によって著された古典文学で、京の猿楽見物に訪れた架空の家族「右衛門尉一家」に仮託して、明衡の生きた時代の世相や職業、芸能、文物などが列挙されています。作者はある晩、京で当時流行していた滑稽な大衆芸能・猿楽を見物し、それは今までになく見事なものだったとして、様々な猿楽のジャンルを列挙し、名人と呼ばれる人々の芸能を論評します。さらに、猿楽見物に集まった人々の中で特筆すべき存在として、下級貴族である「右衛門尉一家」をとりあげ、一家の家族構成やそれぞれの容貌、生活態度に加え、各々の異なる職業やその仕事内容などが業界用語で列挙されている職業尽くし、物尽くし風の書物です。

≫協力内容について

井筒グループ／株式会社Izutsu Mother(衣裳・美術協力)

井筒グループは、1705年の創業以来、一貫して仏教や神道の宗教儀式で用いられる伝統的な装束や、宗教関係用品の製造・販売を行い、現在は、商品の販売・レンタル、古典的美術工芸品や博物館の展示物、映画、演劇への衣裳提供など、事業領域を多方面に拡大しています。この度のパフォーマンス創成にあたり、制作協力として、平安時代の時代考証に基づいた出演者の衣裳をはじめ、舞台を装飾する様々な衣裳、小道具をご提供いただきました。

ひだか和紙有限公司(美術協力)

ひだか和紙有限公司は、土佐和紙作りにおける伝統の原料処理を活かし、時代ごとに変化する厳しい要求を自社の技術的グレードの向上や新技術の開発で応え、和紙製造一筋に取り組んできた高知県の抄紙メーカーです。この度のパフォーマンス創成にあたり、傷んだ絵画や書物、仏像等、文化財の修復に欠かせない「世界一薄い和紙」として、国内のみならず世界中で使われ、メディア等でも取り上げられ大きな話題を呼んだ「典具帖紙」を、演出上欠かせない美術素材としてご提供いただきました。

上賀茂やすらい踊り保存会(出演協力)

上賀茂やすらい踊り保存会は、国の重要無形民俗文化財「やすらい祭」の一つで、葵祭と同じ5月15日に行われる「上賀茂やすらい祭り」を伝承する上賀茂岡本町、梅ヶ辻町の両町内住民による保存会です。この度のパフォーマンスでは、保存会の皆様40名の本公演への出演を予定していましたが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い、出演を断念し、映像にイメージとして登場していただく他、貴重な花笠を舞台美術に活用させていただきました。

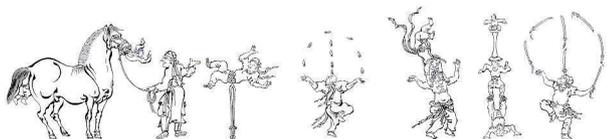
≫ 作品について(脚本・演出の視点から)

2019年のワークインプログレスで我々は、『新猿楽記』の構造を、「文化の作り手」を象徴する「猿楽」と、「文化の担い手」たる京の庶民を象徴する「右衛門尉一家」、この双方の相関関係が生み出す文化創成のプロセスが示された古典文学であると解釈し、京都の文化を創造し、育み続ける構造につながっていると考察、現在にも継承されているとの思いに至りました。当時「猿楽」は、舞踊、歌謡、人形劇、奇術、コントから、大掛かりなイリュージョンや身体を張った雑技など、京の大衆が熱狂する元来国際的な芸能の要素で充たされており、それは目の肥えた京の大衆の中で揉まれ、淘汰されながら、やがてその一部が昇華され、狂言や能、歌舞伎、文楽などへと発展し、今日、伝統芸能とされる日本文化の代表的なカテゴリーを構成しています。つまり、芸能文化の原点は大衆の「熱狂」と国際性にあったと言えるでしょう。老いも若きも熱狂する芸能。私がこのパフォーマンスの副題に「cirque du kyoto」と名付けた所以です。

「新猿楽記～cirque de kyoto～」脚本・演出
演劇プロデューサー・演出家
高橋 浩



参考「冬のサーカス」(フランス)



参考「信西古楽図」より抜粋

≫ 作品について(芸能監修・出演の視点から)

今回の公演は、2018年より始動した本プログラム3カ年の成果を示すものであると同時に、国際文化交流の結実となる意義深い取り組みでした。ところが、昨年に引き続き参加を予定していたフランス人アーティスト・エリック・ド・サリア、ナンシー・ルサク、また本年より参加を予定していた舞台照明家パスカル・ラーズリ、並びに現在パリ留学中の愚息・小笠原 弘晃の4名が、コロナウイルス感染拡大防止によるフランス政府より渡航禁止宣言が発動されたため出演が叶わず、また京都を代表する伝統行事である「上賀茂やすらい踊り保存会」の皆様方も出演を断念された事により、残念ながら急遽内容を変更し、代役を立てての収録となりました。

しかし、脚本・演出の高橋 浩を中心として、KYOTO STEAM—世界文化交流祭—実行委員会事務局の皆様並びに株式会社井筒企画関係者の皆様方、制作スタッフ、出演者が一丸となりロームシアター京都メインホールにて28日・29日の2日間に渡り、無観客ではありましたが素晴らしいパフォーマンスが繰り広げられました。

私は本プロジェクト以前より「新猿楽記」研究を自身のライフワークとしてきました。現在の能楽とは異なるであろう、平安時代に藤原明衡が著した「猿楽」を、是非考証、復元したいと考えており、本公演では能楽の源流である「翁」を、荘厳では無く、民衆を熱狂させた親しみのあるものと仮定し、能楽とは別系統の民俗芸能として伝承されている「翁」をもとに考証、復元しました。また今回の公演で謎に包まれている他のレパートリーについても、復元のヒントを多数見出しました。今後も研究を継続し、平安時代に京都の人々を熱狂の渦に巻き込んだ「新猿楽記」の世界を、是非とも京都の地にて考証、復元し、上演したいと希望しています。

「新猿楽記～cirque de kyoto～」芸能監修・出演
和泉流狂言師
小笠原 匡



第1章 Chapter.5

》クリエーションについて

2020年2月20日～26日に渡り、構成・演出の高橋 浩は、出演者へのパフォーマンスの説明と確認、表現内容の精査、滞在日程および制作内容の確認、照明家へのアートワークの説明およびプラン概要の確認を目的としたフランス取材を敢行しました。昨年のワークショップから参加し、本作品にも継続して参加する予定のエリック・ド・サリア、ナンシー・ルサク及び、照明家のパスカル・ラージリと面会し、昨年のワークショップから培ってきた本作品の最終的な構成を伝え、意見交換を行いました。この渡仏により、役作りや演技に関する様々なディスカッションが重ねられ、クリエーションの方向性が確認されたことで、日仏コラボレーションによる表現の広がり大きな期待が持てる有意義な成果が得られました。帰国後、新型コロナウイルス感染症の拡大が予断を許さない状況となり、公演の可否や、フランスからの出演者、スタッフの来日の是非についての検討が重ねられましたが、3月13日、KYOTO STEAM—世界文化交流祭—実行委員会による公演中止の判断を受け、映像作品として制作するという方針転換を行い、公演台本および演出プランの大幅な変更を行いました。キャストिंगに関しては、小笠原 弘晃が演じる予定だった延命冠者・もどきを青山 郁彦に、藤原明衡に俳優の元木 行哉を、エリック・ド・サリアが演じる予定だった傀儡師の頭領に、パフォーマンス集団・to R mansionの野崎 夏世を、ナンシー・ルサクが演じる予定だった傀儡巫女にダンサーのうえだ ななこを、それぞれ代役として起用しました。また、照明家パスカル・ラージリの日本におけるクリエーションパートナーとして親交の深い阿部 康子が照明デザイナーとして参加しました。稽古の第1弾は3月19日～23日にかけて、昨年ワークインプロGRESSでもご協力いただいた京都府神社庁で実施。小笠原 匡、吉本 由美、うえだ ななこ、青山 郁

彦、黒谷 都、元木 行哉、野崎 夏世と、音楽の三原 智行、稲葉 明憲の参加によって2章8節で構成されるチャプターごとのクリエーションが行われました。稽古の第2弾は24日～25日に、稽古場を京都市北文化会館に移して実施し、クロワッサンサーカス、ジャグラーの目黒 陽介、Hachiro、新猿楽BANDが合流し、パフォーマンス全体の流れを確認しました。本番撮影会場となったロームシアター京都メインホールには26日に小屋入りし、美術セット、各種機材等の搬入・設置・調整を行い、翌27日には特別出演の山本 恭司が合流してゲネプロを行いました。また、本番出演を断念した上賀茂やすらい踊り保存会から、「やすらい祭り」で使用され、中に入ればその年は無病息災で過ごせるとされる貴重な花笠をご提供いただき、舞台美術として活用させていただきました。本番撮影は28日、29日の両日にかけて行われ、2章8節からなる「新猿楽記～cirque de kyoto～」のパフォーマンスが完成しました。舞台作品として企画されたものをわずか数日で映像作品にするための改変を実行した高橋 浩はじめ出演者、制作スタッフにかかる負荷は多大なものがありましたが、創作活動を止めてはならないという、文化の作り手たるクリエイターたちの強い意志と、本作品に関わった文化の担い手たる全ての関係者の意思が一つになって、まさに『新猿楽記』に示された、京都における文化創成のプロセスをなぞるかのよう

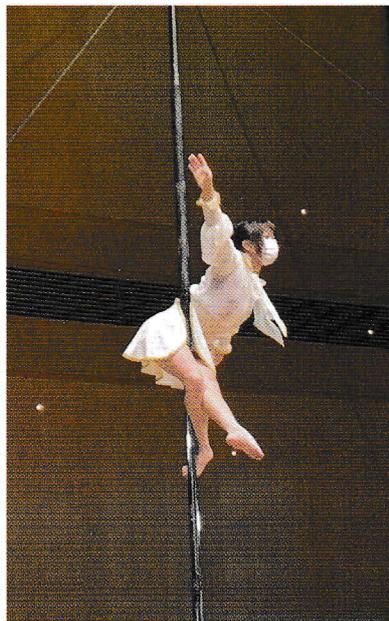
「新猿楽記～cirque de kyoto～」制作
プランナー
緒方 辰之介



クリエーションの様子(京都府神社庁)



クリエーションの様子(京都府神社庁)



クリエーションの様子(京都市北文化会館)



クリエーションの様子(ロームシアター京都)



クリエーションの様子(京都府神社庁)

≫ 作品内容詳細

「新猿楽記～cirque de kyoto～」は大きく2章8節で構成されています。ここでは各章とそれを構成するチャプターごとに作品を解説します。

第1章

章に副題はなく、あえて名付けるとすればパフォーマンスタイトルの前半部「新猿楽記」となるでしょう。そのルーツは海の民とされる傀儡族に創造神として信仰された北斗七星が舞台の背景に浮かびます。

Chapter.1

漆黒の中に浮かび上がる北斗七星。その輝きを写し取ったかのようにジャグリングの白いボールが次々に現れて数を増し、幾何学的な空間を増殖させていきます。舞台には、様々な国から流れ着いた漂流木が漂い始め、やがて神と人とを繋ぐ木偶へと形を変化させます。大地と交信するかのような木偶の動きによって、芸能の原初的かつ本質的な姿が提示されます。

Chapter.2

古代日本の慶事に用いられた鯨幕の色である、黒白に染められた5枚の典具帖紙を背景に、白い衣裳に身を包んだ人のようなモノが現れ、妖精のように静かに揺らぎ始めます。それは古代日本に生きた人々の魂の象徴。数を増やしたそれらは、神々しく気品に満ちた様子で揺らぎ、やがて鯨幕は五色幕へと変化します。モノトーンから極彩色へ。海外文化の流入です。ジャグリングも加わり、神々しく漂っていたそれらは、エネルギッシュな現代のサーカスへと変化します。

Chapter.3

無機質な金色のシートが人体化するシークエンス。無機物を人形(ひとがた)とし、魂の依代とした傀儡族へのオマージュです。やがて登場する傀儡族の頭領は、自ら発する言葉に宿る魂を愛おしみます。芸能を生業とする傀儡族は、祈りの集団でもあります。遊び疲れた魂を鎮めた傀儡族は、自らの魂の導きのまま、また漂泊の旅へと誘われていきます。

Chapter.4

典具帖紙が振り落とされ、まるで煙のようにゆっくりと落下すると、傀儡の巫女による神楽の舞が始まります。神楽は招魂(みたまふり)の儀式。交信するのは古代人の心です。神あそびの際の声音は「ささ」。身体が自然に舞い、やがて、巫女はいつしか流木を手にします。流木は依代。巫女たちの身体には心気が充満し、舞を舞い、舞に舞わされていきます。

Chapter.5

「能にして能に非ず」と言われる神事・祈祷曲「式三番(翁)」の原点に近い古い芸能の姿が、能舞台ではめったに見ることがない「延命冠者」と「父尉」との掛け合いによる古式「翁」として提示されます。人間臭い翁の所業に、豊かでおおらかな古代芸能の息吹が漂います。

Chapter.6

「新猿楽記」の著者にして反骨の儒学者・藤原明衡が登場し、自らの生き様とともに『新猿楽記』を著した理由を語り始めます。そこに作中の登場人物である右衛門尉があらわれ、『新猿楽記』に記された様々な芸能を、身振り手振りおかしく解説します。

第2章

第2章も第1章同様副題はないが、あえて名付けるならばパフォーマンスタイトルの後半部「cirque de kyoto」となるでしょう。芸能文化の原点は大衆の「熱狂」にあるとした高橋 浩の制作意図を、最も端的に具眼化した「サーカス」で構成されるパフォーマンスが、1000年の時を超えて「猿楽」と現代をつなぎます。

Chapter.1

平安時代の様々な衣装や人形で構成された洛中の風景を背景に、右衛門尉と傀儡族の頭領が共に口上を述べると、現代の「猿楽」、サーカスが華やかに開幕。ジャグリングやアクロバット、空中ブランコに綱渡り、高足にクラウン芸と、身体を使った様々なパフォーマンスは時を超えて大衆を魅了します。

Chapter.2

京の庶民の間で大切に継承されて来た文化を象徴する「やすらい踊り」。本来出演を予定していた「やすらい踊り」のシークエンスを、山本恭司が奏でるジュピターの演奏に載せて映像で紹介。やすらい踊りを担う子供たちを、古代から紡がれてきた、大切な文化のDNAをはるか未来へと繋ぐ存在としてパフォーマンスが締めくくられます。

「新猿楽記～cirque de kyoto～」制作

プランナー

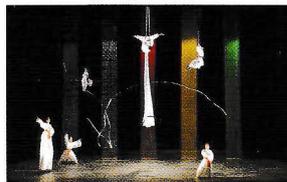
緒方 辰之介



第1章 Chapter.1



第1章 Chapter.4



第1章 Chapter.2



第2章 Chapter.1



第1章 Chapter.3



第2章 Chapter.1